オアシス

文責：学 長
桑 原 雅 次

出雲芸術アカデミーだより　２０２３年１１月１６日発行　第６６号

今年の出雲大社の神迎神事は、１１月２２日となっています。全国の神々がお集まりになり、現世の安寧や縁結びなどをご相談になるとか…。地球規模で考えると解決しなくてはならない事案が山積しており、神様にとってとても忙しい日々を送ることになりそうです。相談事は平和な地でなければ良策は生まれるものではなく、ここ出雲の最適地でじっくりと話し合っていただきたいものです。したがって、個人のお願い事はしばらくご法度といきたいものですね…。

iPhil𝕊 特別記念演奏会を振り返って

「連作交響神樂」の種まきがここ出雲の地で始まり、やがて芽生え、第一番〈國引〉が上演されたのが 2017 年でした。翌年 2018 年には、第二番〈遠呂智〉、第三番〈羅摩船〉と上演され、2019 年に第四番〈大穴牟遅〉、第五番〈鳥遊〉と順調に上演が推移していました。ところが 2020 年、世界中を席巻したコロナ感染症が大流行し、エンターテインメントは勿論、ありとあらゆるものが動かなくなってしまったことは皆さんもご承知のことと思います。

2022 年になるとようやくコロナ感染症も落ち着きはじめ、完結を前に間奏曲〈湖〉が披露されました。

2023 年、満を持して第六番〈國譲〉が、出雲の地では「神在月」に特別記念演奏会としてフィナーレを迎えることとなりました。この「國譲」公演にあたり、プログラム編成を工夫され、落語あり、神楽保存会による神楽舞あり、神つながりの演目でオーケストラ演奏、そして、交響神樂「國譲」が完結されるという多彩なステージとなりました。

この公演に向け、1 年前から様々な準備をしてきました。各方面の皆様にご理解とご協力をいただいた結果、ほぼ満席（チケット半券の数 990 枚）となり、成功裏に終えることができましたこと、この便りを通じて感謝を申しあげます。

その様子を私見ではありますが、振り返ってみようと思います。

◉第 1 部【観る神楽】

▶落語「出雲大社の由来」～古代史落語家：桂　竹千代

落語が何故コンサートに…？　と思われる方も多かったと思います。今年の春頃、今回のコンサートプログラムを検討されている時、中井芸術監督の「落語で神話を語れるようなものがないかなー…」のつぶやきから、オーケストラマネー

ジャーの森山氏が早速検索され、YouTube から神話を中心に活躍されている落語家がいることを発見されました。早速、会議中に視聴すると全員が爆笑!！　ダメ元で所属事務所へオファーをとってみると幸運にも好感触であり、今回のコンサートでの出演が叶いました。

当日の様子は、難解な古事記や日本書紀の内容を落語調で笑いを誘いながら会場の皆さんの心をつかみ、いつの間にか神話の世界へ引き込まれ、〈國譲〉神話がより鮮明に理解できたことと思います。

▶神楽「荒神」～万九千社立虫神社神代神楽保存会

万九千社立虫神社の神楽は、いわゆる神主さんが舞う由緒ある典型的な出雲神楽です。「荒神」は、「國譲り神話」を題材にした神楽で、別名を「國譲り」とも言われます。

交響神楽〈國譲〉が創作された原点版の実際の神楽を実演していただきました。普段は、神社境内で舞われているものをホールのステージで、1000 人近い観客の皆様を前に勇壮に舞われ、出雲神楽の醍醐味を味わうことが出来ました。神楽の内容が予め理解できたところへ、舞にも一つ一つの意味があることがわかり、私たちの郷土神事がさらに興味深く感じられた一時でした。

◉第２部【オーケストラ】指揮：中井章徳　演奏：出雲フィル交響楽団

▶E・エルガー作曲：行進曲「威風堂々」第１番　作品 39-1

イギリスの第２国歌とも呼ばれている有名な曲ですが、Jr.フィルが主体となって演奏しました。コンサートマスターも Jr.が担当し、大人の演奏者を堂々と引っ張る姿はとても逞しく、まさに威風堂々の曲名と共鳴しているかのようでした。Jr.フィルのメンバーも出雲フィルの皆さんと一緒に演奏できることは、オーケストラの醍醐味を肌で感じることになり、何ものにも代えがたい体験となったことに違いありません。演奏もとても素晴らしく、特に中間部の美しいメロディーに入ると、聴衆の心を鷲づかみしたことでしょう。

▶久石 譲作曲：「千と千尋の神隠し」組曲

この作品は、誰もが知る“宮崎 駿”監督による長編アニメの映画作品です。これの音楽を担当されたのが“久石 譲”氏で、後に交響組曲として作曲し直された作品です。アニメを鑑賞した時の印象と少し違い、曲自体のレベルが一段とアップされており構成も複雑でとても聴き応えのある作品でした。

この曲は、ゲストコンサートマスターとして“高畑壮平”氏にオーケストラを仕切っていただきました。高畑氏が曲作りの過程において、指揮者の意図を演奏者に端的に伝え、それに応えようとオーケストラ全体が躍動し、演奏そのものに反映されていく様子を目の当たりに出来たことから、レベルの高い組曲になったことに間違いないようです。

次号へ続く

※第3部の様子とフォトギャラリーは、第67号でお伝えします。